

コンラート・ヴィッツと初期ネーデルラント絵画
——《人間救済の鏡祭壇画》を中心に——

沖 澄弘 (アムステルダム大学)

現在、バーゼル、ディジョン、ベルリンに分かれて収蔵される12枚の板絵は、あわせて《人間救済の鏡祭壇画》と呼ばれる。本発表は、この作品の様式・図像の検討を通じて、コンラート・ヴィッツ(1400年頃-1445/47)の初期ネーデルラント絵画修得の具体相を明らかにすることを目的とする。これらパネルは全て、バーゼルの聖レオンハルト教会主祭壇のための失われた祭壇画もしくは祭壇彫刻の翼部に由来することが確かめられており、また、現存するヴィッツによる署名作は1444年の年記のある《聖ペテロ祭壇画》のみであるが、様式的に本作の画家本人への帰属は疑い得ない。

《人間救済の鏡祭壇画》が初期ネーデルラント絵画の新様式の影響下に制作されたことは、先行研究において当然視されてきた。反面、シュヴァーベン出身のヴィッツが、如何にしてこの新様式の自然主義的造形語法を修得したのかに関しては、伝記の不確かさから現在に至るまで詳細は不明とされる。この点に関する先行研究はいずれも概観的なものに留まる。すなわち、1434年のバーゼルでの親方登録以前、遍歴時代のヴィッツが低地地方に直接赴き、現地の画家の工房にて一定期間を過ごしたとする見解と、公会議期にヨーロッパ各地から流入したと推測される小型板絵や彩色写本を介して、バーゼルにいながら低地地方由来の新様式を間接的に吸収したという見解の二説がある。

本発表では、まず上記の間接吸収説を、ヴィッツの着想源と度々指摘されてきたツウェーダー・ファン・キューレンボルフの画家による写本挿絵の再検討を通して否定する。次にファン・エイク研究の近年の知見を踏まえた上で、《人間救済の鏡祭壇画》に見られる《ヘント祭壇画》からの引用を個別に検討し、ヴィッツが後者を少なくとも実見したことを示す。さらに、《人間救済の鏡祭壇画》にみられるいくつかの特徴的な空間描写の検討を通じて、ヴィッツのファン・エイク作品への接触がモチーフレベルでの引用に留まらないことを示し、このバーゼルの画家がヤン・ファン・エイク工房で一定期間を過ごした可能性を指摘する。加えて、もう一方の着想源として指摘されてきたフレマルの画家に関しては、ヴィッツ作品に見られるフレマル的モチーフ、特に鋭角的なドレーパリー表現は、むしろファン・エイク作品に由来することを例証し、フレマルの画家の影響を否定する。以上の考察を通じて、《人間救済の鏡祭壇画》を、15世紀第2四半期ライン上流域におけるファン・エイク影響下で制作された最初期の作例であることを示す。